

不当！ 不起訴処分！

根拠は 杜撰な捜査記録と 告訴人提出の証拠書類を全て排除し、事実のことごとく無視した『鑑定書』

（刑事告訴までの経過）

事件は 2004 年 10 月 2 日に起こりました。乗用車で走行中の息子の車両にセンターラインを突破した大型ダンプが息子車両の右側面に激突し、息子は即死しました。

路面には大型ダンプがセンターラインを突破し、黒々としたタイヤ痕が残りましたが、警察は息子に嫌疑を掛けました。事故発生当時から不審な点が多く、独自調査の結果から相手側に過失がある数多くの証拠を確保しましたが、警察は取り合わず「あとは検察庁とやってよ」と検察庁に責任を転嫁し、息子に嫌疑を掛けたまま書類送検しました。

2006 年 2 月に相手運転手を業務上過失致死罪で刑事告訴を行いました。検察庁は事故原因の判断がつかず、2006 年 4 月に「鑑定士」に鑑定依頼を行うことで「中止処分」としました。（中止処分：鑑定が確定するまでは起訴、不起訴の判断をしない処分方法）

（無責任極まりない川越検察庁）

鑑定人が「鑑定書」を提出したのは 2008 年 6 月で、告訴から既に二年四ヶ月が経過していました。

「鑑定書」を閲覧した結果、検察庁は告訴人が提出した証拠書類の全てを鑑定人には渡されなかったことが発覚し大騒動になりました。担当検事は昨年 4 月に替わり、新任の検事は鑑定人に資料が渡されなかったことは全く知らなかったのです。

鑑定人は刑事記録のみで「鑑定書」を作成したのです。刑事告発から三年後の処分決定でしたが、検察庁は鑑定人への鑑定依頼を行った以外は何もしなかのです。

（「鑑定書」は事実を無視した粗悪品）

鑑定書は謄写が認められず、致し方なく全文を書き写し検討しましたが、とても二年を要するようなものではなく、一ヶ月もあれば十分に作成可能な分量でした。またその内容は粗末なもので愕然とさせられました。推論と憶測、事実をねじ曲げ、ひたすら刑事記録の追認のみを狙った内容であり、一般社会では通用しない粗悪品です。これも証拠書類の全てを鑑定人に渡さなかった検察庁の責任です。

（隠蔽されてきた刑事記録から重大な証拠を確認）

2006 年 2 月に閲覧した刑事記録（実況見分調書）は一部だったことが分かり、今年 2 月に急遽、弁護士会請求による「全記録の謄写閲覧」を行いました。三年前に閲覧した記録は 5 通の内、2 通のみだったのです。

新たに閲覧した記録を見て、改めて捜査の杜撰さに泣かされましたが、重大な証拠も確認しました。一つは事故当日の路面にガラス片の散乱が確認されたことです。もう一つは息子の身体の損傷状態から、衝突時の姿勢が特定され、私達が想定した事故形態であることが分かりました。全記録の早期の閲覧が許され

